

擬似家族における「日常」という舞台  
— 小舎夫婦制寮舎に見る「暮らしの持つ力」 —

立命館大学大学院応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
家族機能・社会臨床クラスター  
高木 倫子

現代の家族の問題を取り上げたとき、私事化した家族形態の不安定さが先ず注目される点であろう。不登校や引きこもりなど、家族の揺らぎを感じるのである。

では、私事化されない家族形態で生活を営む家族にはどんな意識がはたらいているのであろうか。

本研究は、私事化されない擬似家族を営む定位家族の家族観を明らかにするために、児童自立支援施設の小舎夫婦制の寮舎で寮長もしくは寮母として働く親たちを対象に、インタビュー調査を試みた。寮生たちとともに暮らす寮長や寮母、そして実子の生活を聞き取り調査し、「仕事と生活が混在した中」で寮舎を維持していくことの家族の意義とは何なのか、そこにはどんな価値観があってどんな意味があるのだろうか。

全国の児童自立支援施設のうち、小舎夫婦制をとる二つの施設の協力を得られた。分析方法は、聞き取り調査した結果をKJ法によって、意味単位に抽出してカテゴリーとして定義づけた。

今回の研究で明らかになったことは、しきりの曖昧な境界を越えて、相互に影響を及ぼしながらそれぞれが自己成長をし、固定化された役割からの解放を促しているというプロセスがあったということである。周囲の共同体を絡めながら、公的な夫婦であり、私的な夫婦でもある寮長や寮母にとって、労働と生活の混在した暮らしにこそ、人との関係性から「個」を確立させていく力があると言える。

固定化された役割に囚われて生きづらさを抱える現代にあって、自在で解放された役割を持つことの「安定感」は対人援助者として、また現代人にとって、もっとも在るべき姿ではないだろうか。

キーワード：小舎夫婦制，擬似家族，役割